

公開された「侵華日軍第731部隊遺跡」

(大東文化大学) 田中 寛

I. 平房再訪

2001年6月12日、中国黒龍江省ハルビン郊外の平房にある「侵華日軍第731部隊遺跡」が正式に对外公開された。これまでは、平房駅からの引込み線をはさんで建てられた「侵華日軍第731部隊罪証陳列館」の展示資料と、部隊遺跡の象徴ともいえる動力班のボイラー跡を始め、点在する僅かな遺跡しか一般にはふれることができなかったのが、今回、旧本部楼を全面的に改・補修し、周辺に発掘された遺跡群を整備することによって、一般に公開されたわけである。筆者は2001年の8月に、この新装なった「侵華日軍第731部隊遺跡」を検分した。これまで筆者は数次に亘って「731部隊」遺跡を訪れ、部隊の史実の解明とともに、現地関係者とも意見交換、交流を深め、遺跡保存について深い関心を持ち続けてきた。小文では、「731部隊」遺跡の現況を報告するとともに、遺跡保存の意義、およびこうした戦争遺跡を「負の遺産」としてどのように継承していくべきか、個人的な印象もまじえながら、いくつかの問題を提起してみたい。

日本がハルビンを占領下においたのは、「満州事変」の翌年、1932年2月5日のことである。7月11日には「ハルビン市政準備市」を設置、翌年の7月1日には「ハルビン特別市」とした。また旧日本軍はハルビン南郊の平房地区の30平方キロを占領し、1936年5月には秘匿部隊「731部隊」を設置して世界最大の細菌基地を建設した。防疫給水は建前で、その目的は日中戦争と将来の英米、とりわけ対ソ戦をにらんで経費の少ない生物・化学兵器の開発を進めることにあった。その後、

「731部隊」は中国各地に作られた細菌戦部隊のネットワークの中核として機能し続け、細菌戦兵器の開発、実験、実戦の過程で、少なくとも3000人にのぼる人体実験をしたことでも知られる。中国では「食人魔窟」（殺人鬼の棲家）と称されるように、ハルビンという土地の日本による侵略を受けた残虐な被害の最も象徴的な事例がこの「731部隊」にほかならない。部隊の「進駐」によって、平房の人々は住まいを追われ、ある人々は「勞工」として建設に従事させられていった。平房は日本軍国主義に蹂躪された、永遠に記憶に残る土地なのである。

こうした史実を「侵略の鉄証」として後世に伝えるため、1985年に「侵華日軍第731部隊罪証陳列館」が「731部隊」元本部楼の石井四郎部隊長執務室を整備して開設された。その後、施設の展示を拡大するため新館の構想が平房区人民政府を中心に進められ、戦後50年目の1995年の8月15日に日本側平和友好団体による民間募金も合わせて新館が落成した。このたびの「遺跡」の公開にもなってこの新館はひとまず閉館され、新しく公開された「731部隊遺跡」の旧本部楼内に再び「侵華日軍第731部隊罪証陳列館」が開設されることになったのである。

II. 陳列館と遺跡の検分

比較的保存状態のよかった入口の「衛兵所跡」は入場券の販売所と変わり、正面入口から旧本部楼までの通路はコンクリートできれいに舗装されている。正門左手の周囲の壁には中国語、英語、日本語による「遺跡」の概要が掲示されていた。陳列館はついこの間までは第17高等職業中学校の

教室として使用されていた旧本部楼の1階と2階部分である。

展示室は計13、それに映写室、見学順路の最後に殉難者名のプレートを掲げた回廊がある。それぞれのテーマにそった見学ができるものの、まだ開館したばかりのせいか、照明、展示の内容、例えば石井四郎部隊長の執務室が再現されていないことなど、検討すべき点も多く見られた。

旧本部楼を出ると、昨年から発掘されてきた「四方楼」(口号棟)の一部を参観することができる。「四方楼」は「731部隊」の中枢部で研究施設が集中したところであると同時に、人体実験に処する“マルタ”を収容する「特設監獄」のあったところである。一帯は参観のための歩道が整備され、発掘した現場の土砂崩れをふせぐために白いタイルで斜面の大半を覆っている。そのため、一種非現実的な空間を醸し出している。かつて敷地内にあった工場の塀や資材を運び出し、移転したあとの広大な敷地に数カ所、発掘された見るからに頑丈そうなコンクリートの残骸が野晒しになっている。6号楼、7号楼、8号楼の一部にはすでに雨水が相当溜まっているところがあるが、排水処理などの何らかの保全設備を検討中だという。

「特設監獄」のあったと思われる場所に石段を伝って下りてみる。基礎のコンクリートは相当に頑丈なものの、煉瓦部分は傷みが激しく、冬場の風雪や凍結時期には崩落の危険性が大きく、このままではさらに風化の進む可能性がある。発掘していく過程で新しい構造も発見されたものの、施設の照合・鑑識の作業もこれからの課題となっている。しかし、部隊関係の証言者が出てきて立ち会わない限り、特定は極めて困難であるとの話である。その少し離れにあった「二木班結核菌実験室」の建物は、高く生い茂った夏草に深く覆われ、案内標識もなく、その存在がほとんど参観者の目にふれにくかったのも残念なことであった。

左手の鉄柵を隔てて住民宿舍の裏手にある第二

保護単位も一般の参観コースからは死角になっている。ここには「吉村班冷凍・凍傷実験室」、「小動物地下飼育室」などの施設がある。ここも全景が視野に収まりにくいほど、夏草が高く生い茂っていた。「吉村班」の建物は補修した部分も多いが、中に入ると最近まで倉庫として使用されていたらしい形跡がある。冷気を送り込む円筒状の部分はコンクリートで固められ、わずかに窓の痕跡が認められるが、外観はほぼ原形をとどめている。「小動物地下飼育室」の一帯は土が盛られ、数箇所通気孔がのぞく。内部は危険なこともあって公開されてはいない。ここでは木造の「黄鼠飼育室」の保存状態がもっとも良好であった。

隣接する動力班のボイラー施設跡は、広島原爆ドームとも比較されるものであるが、近年崩壊が進み、その傷みは深刻である。3本あった煙突のうち残された2本のとくに右端部分の崩落が目立つ。施設の爆破のために朝鮮方面軍の支援を得ながら3度爆破を試みたものの、破壊しつくせなかった。その爆破音はハルビン市街まで轟いたという。しかし、多年の風雪にはその原形をとどめ続けることは難しい。残念なことに一帯は整然と植樹され、周辺を舗装した遊歩道が設けられ、以前見たときほどの迫力は感じられなくなっていた。ボイラー施設跡の裏手には民家が密集し、至るところに建物の基礎コンクリートの一部が剥き出しになっているのが見える。一旦、興建街に出て、「益友廃旧物品收購站」と書かれた民間施設の中に入っていくと、奥に直径10メートル以上はあろうかと思われる巨大な「地下ガス貯蔵室」がある。地下の調査はなお危険をとまなうとのことだ。このほか「兵器班」、「田中班昆虫動物増殖室」、「航空班」、「山口班細菌弾組装儲存室」なども見学する予定であったが、残念ながら今回は時間的な余裕がなかった。これらの施設の発掘、整備は、引き続き次の第二期の作業に受け継がれる。

今回の検分では覆いがなくなつて見学しやすく

なった分だけ、「遺跡」のもつ広さのイメージが変わったという印象をもった。「遺跡」の整備は平和公園の趣旨を盛り込んで進められている。多くの参観者が訪れるとなると、駐車場をはじめ休憩所の施設や、また周遊しやすいように現場を整備する必要も出てくる。一方、「遺跡」そのものの保存の意義や管理の方法を考えると、難しい問題も並存する。歴史的建造物という側面を重視せず、景観を意識して人工的な印象を与えることになっては「遺跡」の意義も緊張感も損なわれるからである。これは、「本物」に手を加えることで、果たして保存の意義が達成されるのかという、とくに戦争遺跡保存にあたって共通した問題となっている。発掘された「特設監獄」跡から、見学者は何を、どう想像できるであろうか。複雑な思いがいつまでも胸を離れなかった。

Ⅲ. 「731部隊」遺跡保存の動き

日中戦争のさなか、細菌戦のための兵器開発とその実戦とともに、細菌、毒ガスなどの人体実験で多くの中国人、朝鮮人らを虐殺した旧日本軍の「731部隊」は、日本人にとってまさに現代史の汚点である。戦後半世紀以上を経て、いま旧施設をユネスコの「世界文化遺産」へ登録することをめざす運動が中国ハルビン市平房区を中心に進んでいることは、日本ではほとんど知られていない。以下、この保存運動の現状を概述しておきたい。

「731部隊」の遺跡を後世に残し、戦争犯罪を伝承する事業は、日本側に創設された「731部隊遺跡世界遺産登録」を目指す国民連絡会と中国・黒龍江省対外友好協会の協力、罪証陳列館、平房区との共同事業として、2000年5月から「遺跡」の発掘と補修、復元作業などが急ピッチで進んでいる。必要資金は平房区が概算したところでは総額1億元（13億円）で、2001年6月時点での市・省の予算はそれぞれ1000万元、一般からの募金が744万元、計2744万元（4億円）であったが、こ

うした経費にくわえて、世界遺産登録の基準を達成するまでには、遺跡の発掘、補修、既存の建物と住民の移転、遺跡復元作業など、最短でも今後4年以上かかると言われる。中国では官庁、企業、学校など市民レベルでの広範な募金活動が展開されている。まず、区域内の住民122戸を転出させたあと、機械・雑貨・縫製などの11の民間企業の移転作業を完了した。その後、中学校として使用していた「731部隊」本部楼建築物の半分を移転、2000年の末までに外壁と内部の修復を終えて、2001年早々から新たな展示のための作業に移った。

また、旧日本軍によって敗戦直前に「国際法に違反した細菌・毒ガスによる大量殺戮の証拠」隠滅のため、部隊建物を爆破、医療施設、記録文書などが焼却されたが、その中で最も極秘とされた「特設監獄」（7、8号棟）とその周辺の発掘、補修作業が進み、半世紀以上を経て、生々しい地下の煉瓦建築群が元本部楼の展示室とともに公開されることになった。今回、施設跡からは1200点もの医療器具や食器類が発掘されたというが、中学校の移転完了後に展示されとのことである。なお、敗戦直前に“マルタ”と呼ばれた中国人、朝鮮人ら約400人の遺体は毒ガスで虐殺した後、ガソリンをかけて完全に焼却し、灰と首を「カマス」に詰めて足枷、手枷とともに松花江に捨てたという元部隊員の証言もあるように、今回の発掘調査では発見されなかった。

住民区では今なお施設を生活の基盤として「活用」しているケースも少なくない。保護単位には入らないが、もと軍人宿舎などもそうである。実際の移転となると、膨大な費用と時間、労力がかかり、それに精神的な抑圧を強いられる。住民はかつては「部隊」建設のため、さらに今回は「遺跡」保存のために、2度の強制的な立ち退きを要求されるのである。

また発掘の現場からは細菌に汚染された残骸が日にさらされるという危険性も否定しえない。筆

者は「遺跡」検分の日に通りがかった平房のある工事現場で労働者が地面の下から電線の塊のようなものを懸命に引き揚げようとしている現場を目撃したのだが、万一、それが不発爆弾のような危険をとまなう物であったとしたらと思うと、背筋が寒くなった。実際、筆者の滞在した2週間ほどの期間でも、ハルビン市内で旧日本軍の遺棄した巨大な不発弾が4発見つかった。当地の代表紙である『生活報』によると、2001年に入って14発が発見されたということだ。最近20年間に東北地区で発掘された旧日本軍と「満洲国」によって遺棄された砲弾・爆弾は合計3894発にものぼる。とくに1990年代になって道路、住宅などの都市建設が進み、その過程で発見された砲弾は毎年100発から400発にのぼるという。“九・一八事変”70周年の9月18日には、黒龍江省阿城県において人民解放軍によって492発もの遺棄砲弾の爆破処理が行われ、その模様はテレビで生中継された。

同じく『生活報』2001年8月15日付によれば、市内を流れる松花江には焼却された“マルタ”が捨てられたほか、河底には旧日本軍の遺棄した弾薬（火薬）が沈んでいるという。ハルビン市民の利用する水のほとんどをこの松花江に頼っているわけだが、こうした戦争の残した現実を日本人としてどう考えればよいのであろうか。

2001年夏からの第二期工程では、地下の貯水場、毒ガス貯蔵室、細菌貯蔵室などの発掘と補修を重点とする作業に入った。同時に「731部隊」の毒牙にかかった殉難者の慰霊碑が建立される予定である。さらに陳列館の展示品を充実させ、区域内の植樹、緑化作業も進められる。整備の全工程が終了すれば、世界遺産への登録申請の準備に入る。史跡としての保存と平和公園的な要素をどう結合させるのか。戦争遺跡としての広島、アウシュビッツの場合とは異なった条件・目的を考えなければならない。「731部隊」遺跡保存の意義は、日本軍国主義の罪行を記憶すると同時に、世界におけ

るNBC兵器（核兵器・生物兵器・化学兵器）撲滅のための資料研究センターとしての役割をも担うものでなければならないだろう。

こうした事業の展開によって、往時の侵略と虐殺の歴史的事実と、人間を実験台にした極悪非道の「731部隊」の施設群が戦争遺跡として白日のもとに曝されることになった。同時に非業の死をとげた人々の尊厳が戦後半世紀以上を経て、ようやく回復されようとしている。1998年に黒龍江省檔案館（公文書館）で発見され、1999年8月に対外公開された40数名の「特移（特別移送）扱」文書に引き続き、2001年の9月6日に長春の吉林省檔案館所蔵の277名にのぼる憲兵隊による中国人、朝鮮人ら「特移扱」文書の一部が公開された。山辺悠喜子氏の検証によれば、このうちの33人は黒龍江省檔案館によって公表された「特移扱」人員と重複していることが判明した。今回の文書発見から推測すれば、「特移扱」による被害者はハバ



公開された「731部隊」遺跡の一部

ロフスク裁判で川島清が証言した3000人を相当数上回るのではないかとされている。さらに証拠文書が発見される可能性も高いという。1940年夏季に新京(現長春)郊外の農安において発生したペスト流行の実態についても、今回の新資料の発見によって、解明がいつそう進むことが期待される。

また、1998年に発見された文書が、2001年12月12日、ハルビンにおいて檔案館関係局、日中の研究者、日本の民間平和友好団体の共同作業により、『「七三一部隊」罪証鉄証・関東憲兵隊「特移扱」文書』として限定部数公刊された。各地の関東軍憲兵隊がソ連のスパイ容疑や不穏分子として拘束した中国人52人を「逆利用の価値なし、特移扱とすべし」として憲兵隊司令官に「731部隊」への移送許可を要請した文書で、文字も比較的鮮明であり、一級資料である。このうち42人は司令官の許可書付きで、旧日本軍が組織的に人体実験に加わったことを明確に示している。

こうした「731部隊」遺跡の発掘とともに証拠文書の発見から、もはや、「731部隊」の存在は確固とした歴史的事実であることが明らかになったのである。しかし、今回の「731部隊」遺跡の公開については、一部を除いて日本ではほとんど報道されなかった。中国の主要紙でも同様に、『北京晩報』が2001年6月12日付けで第二面全部を使って紹介したのが、筆者の見た限りでは最も詳しい記事であったようである。対外公開の日の報道も地元新聞にはそれほど大きくは掲載されなかった。これには経済交流を優先して両国間の感情的な刺激や摩擦を避けようとする意図も感じられるのであるが、いずれにしても内外の広範な人々の関心を得るための広報的活動も、これからは必要となってくるであろう。

IV. 「731部隊」解明をめぐる歴史認識

今、中国では「731部隊」の罪行を明らかにする機運が高まっている。黒龍江省社会科学院に置

かれた「侵華日軍731細菌部隊罪行研究中心準備委員会」が中心となって、不定期ながら、『侵華日軍731細菌部隊罪行研究通報』という機関誌が出されている。細菌戦の訴訟・裁判の経過報告、「特別移送」殉難者の調査報告などが掲載され、2001年の7月現在、4期まで出されている。また、1996年から刊行されている季刊誌『東北淪陷史研究』（東北淪陷十四年史編纂委員会、吉林省社会科学院）にも「日本原七三一等細菌部隊成員及其他参与細菌戦活動人名録」を始め、研究論文、調査報告がほぼ毎号に掲載されている。

近い将来、「731部隊罪行研究センター」の発足により、日中の研究者、平和運動グループを結集して、証言の記録、研究文献の翻訳をはじめ、「731部隊」をめぐる細菌戦の実態究明がさらに進むことが期待されている。既存の南京大虐殺研究センターなどもそのモデルとなるであろう。また、これと並行して罪証陳列館の中に金成民氏を所長とする「侵華日軍細菌戦与毒気戦研究所」が設立された。今後は、省社会科学院、ハルビン社会科学院の研究員スタッフらと陳列館館長、副館長および陳列館研究員スタッフとの一体的な協力の取り組みと、さらには日本側研究者、専門家との緊密な連繋が求められている。

こうした中国での動向に対し、日本における「731部隊」、細菌戦に関する認識はどうであろうか。その一端を今日の歴史教科書の記述をめぐる問題にみることができる。

「731部隊」の記述をめぐるのは「南京大虐殺」とともに1980年代のいわゆる「教科書問題」でも焦点の一つとなった。その懸案は今日にいたっても双方の認識の一致をみていない。例えば、「新しい歴史教科書をつくる会」による『新しい歴史教科書』（扶桑社、2001）のなかの、「満州国」に関する説明は以下の通りである。（注：資料は朝日新聞2001年7月9日付夕刊による）

満州国は、五族協和、王道樂土建設をスローガンに、日本の重工業の進出などにより経済成長を遂げ、中国人などの著しい人口の流入があった。

これに対し、中国の修正要求は以下のようであった。

日本は掠奪を働いた。大量の移民を行い、土地を強制的に占領した。日本軍は細菌戦を研究する試験基地を造り、731部隊は生体実験を行い無数の中国民衆を殺害した。これらの事実を隠し、「繁栄」を美化しようとしている。

これに対する文部科学省による「検討結果」は以下の通りである。(傍点、引用者)

満州国は関東軍が建国を宣言し、実権は関東軍がにぎっていたことから、傀儡国家であった実態が記述されている。抗日運動が起こっていた実態も記述されている。明白な誤りとは言えない。731部隊について記述するよう求めることはできない。

後段の「731部隊について記述するよう求めることはできない」という主張は、数箇所を繰り返される「(具体的にどのような歴史的事象を取り上げ、)(歴史事象を)どのように記述するかは、執筆者の判断にゆだねられている」という認識が下地となっている。記述の根拠が「執筆者の(自由な)裁断」にもとづく主張する限り、客観的、科学的実証性を持ち得ないことは明らかであろう。また、この一連の「検討結果」に30箇所も見られる「(……ことは広く認められており)(大枠としては)明白な誤りとは言えない」といった表現にも、日本と中国における日中戦争期の史実の記述、歴史認識をめぐって、なお大きな落差、温

度差があることが窺われる。「明白な誤り」の内実を拒否する、こうした曖昧な事実認識のありかたは、日中間の歴史の共有に禍根を残すことにならないだろうか。

歴史認識の「共有」の基点となる史実の「共有」にも、明らかな懸隔が見られる。細菌戦の訴訟裁判も4年目を迎え、提出された認定資料をまとめた『裁かれる細菌戦』(731・細菌戦裁判キャンペーン委員会発行)も7冊目をかぞえた。各方面の専門家、研究者のレポートは信憑性の高いものばかりである。細菌戦裁判にともない、来日する原告の細菌戦被害者遺族の体験証言を聞く集い、「731・細菌戦パネル展示会」の開催(731・細菌戦展示会実行委員会)も数次にわたって行われてきた。その概要は以下の通りである。

中国への侵略戦争の過程で、日本は細菌戦部隊を組織し細菌戦を実行した。1940年には、浙江省の衢州、寧波市に、1941年には湖南省の常德市にいずれもペスト菌、枯れ葉剤を散布、また、1942年には浙江省の江山市にコレラ菌などを散布し、少なくとも数万人の中国住民が殺害されたとされる。そもそも細菌兵器の使用は、当時の国際法でも禁止していた戦争犯罪であった。日本は現在に至るまで教科書の記述はもちろん、中国に対してこうした細菌戦を行った事実を隠し通し、謝罪と賠償を拒否している。「731部隊」をめぐる双方の見解の相違は、まさに日中間の歴史認識の象徴でもあるといってよい。

V. 現代に生きる「731部隊」の記憶

戦後、アメリカGHQは石井四郎ら、「731部隊」関係者に対して戦犯追及をすることなく、ソ連と対峙する冷戦を前に、「731部隊」の細菌戦、生体実験に関する資料と引き換えに、彼等を「免責」したことは有名な話である。また、「731部隊」の罪行を追及することは、当時統帥権のあった天皇の存在自体を否定し、戦後のアメリカによる日本

の統治システムにも不利益をもたらすなどの、複合的な要因があったためである。封印されていた現代史の闇の扉を開けようとする「731部隊」遺跡の公開とその保存は「731部隊」の罪行を白日のもとに晒し、さらには天皇の戦争責任、戦争犯罪免責という、東京裁判の不当性をも問うことになる。前述の教科書の修正要求に対し、ことさらに「731部隊について記述するよう求めることはできない」と主張し続けることも、こうした現代史の汚点を自ら黙認し、事実を黙殺することにほかならない。こうした「隠蔽」の存続は、戦争責任についての国際的な信頼を損ない、歴史認識の共有を根本から閉ざすことになろう。

2001年9月18日の「国恥の日」、新装の「侵華日軍第731部隊罪証陳列館」において、多くの民衆の見守る中、「黒龍江省・ハルビン市各界青年九・一八事変七十周年公祭大会」が厳粛に執り行われた。追悼の花束が照明に照らし出され、「現代文明史上最も残虐な一頁」である「731部隊」の罪行を弾劾し、「歴史の忘却は裏切りに値する」と宣言された。「731部隊」のもたらした罪行の「鉄証」（動かぬ証拠）はこれからの調査研究によって次第に明らかにされ、また、それらの教訓は「特移扱」にされた人達の遺族の悲痛な訴えを胸に刻みながら、着実に未来へと受け継がれていくのであろう。

ハルビンの人々の胸中に去来する永遠に癒されることのない記憶は、中国語で発音される“チー・サン・ヤオ（731）”という響きのなかにも疼いているようだ。残虐なるがゆえに「忘れない」心情と、「鉄証」として「残さなければならない」心情のせめぎあうところに「731部隊」という史実のもつ、特別な「感情記憶」が存在するのかもしれない。この「感情記憶」を「事実の記憶」として客体化し、後世に継承してゆくためにも、日中間の共同研究の進展を強く望むものである。

附記：小文をなすにあたり、「『731部隊遺跡世界遺産登録』を目指す国民連絡会」事務局長の三嶋静夫氏、山辺悠喜子氏から資料の提供と適切なご助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

[参考文献]

- ・七三一研究会編『細菌戦部隊』晩声社、1996
- ・葉啓暁他編著『黒龍江文物要覧【近・現代巻】』黒龍江人民出版社、1999
- ・関成和著、松村高夫他訳『七三一部隊がやってきた村：平房の社会史』こうち書房、2000
- ・田中寛「ホットアングル：世界遺産登録を目指す七三一部隊遺跡」『世界』2000年10月号、岩波書店
- ・「ABC企画NEWS」第19号（2001.11.30）ABC企画委員会編集・発行
- ・『「七三一部隊」罪行鉄証・関東憲兵隊「特移扱」文書』中国黒龍江省檔案館・中国黒龍江省人民対外友好協会・日本ABC企画委員会編 中国黒龍江人民出版社、2001.12
- ・資料集シリーズ『裁かれる細菌戦』第1集～第7集、731・細菌戦裁判キャンペーン委員会、ABC企画委員会発行、731部隊細菌戦被害国家賠償請求訴訟弁護団協力